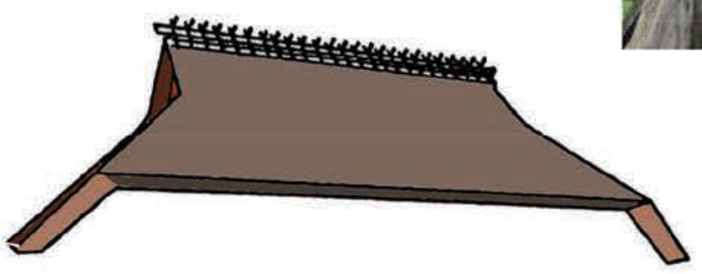
蚕を飼育し、繭を作る　養蚕業

ぐんまの土地は、平らなところが少なかったり、赤土だったりして、稲作には向いてないんだよ。だけど、水はけがいいので、桑の木を育てるにはいいんさね。

富沢家住宅（中之条町）（国重要文化財）

富沢家住宅のある大道は、江戸時代に開かれた新田村で、当家はこの村の名主を務めた名家です。運送業や金融を行う一方、女性たちによる養蚕が行われました。この家屋は江戸時代後期の建築で、二階に専用蚕室を持つ国内最古級の養蚕農家です。屋根に特徴があり、二階に光と風を取り入れるため茅葺きの正面を切り上げた「前兜造り」となっています。

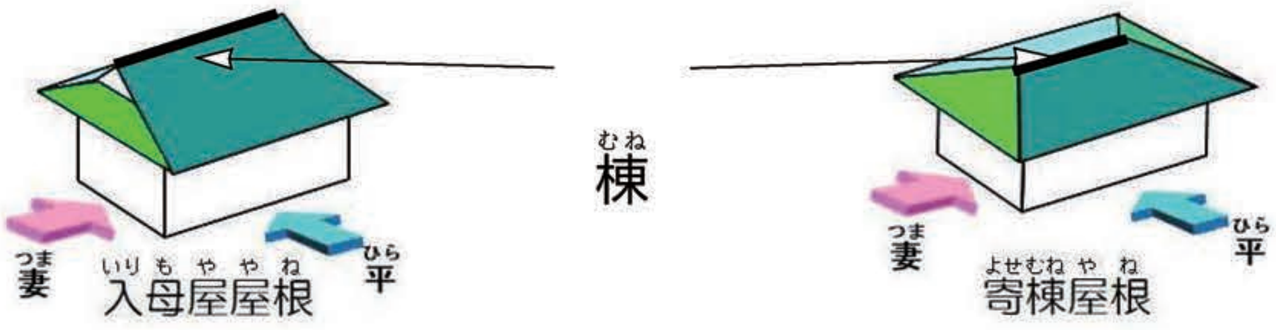
前兜造り



一般的に「兜造り」とは、入母屋や寄棟の妻側の屋根を切り上げた形状の屋根を指します。妻側から見た形状が「兜」に似ていることから、そう呼ばれています。切り上げる目的は、採光や換気です。

富沢家の屋根は、一般的な兜造りとは異なり、平面の屋根を切り上げた「前兜造り」となっています。

「一階　土間」



※　棟（屋根の頂上で水平な部分）と直角の面を「妻」、平行の面を「平」といいます。

「二階　蚕室」

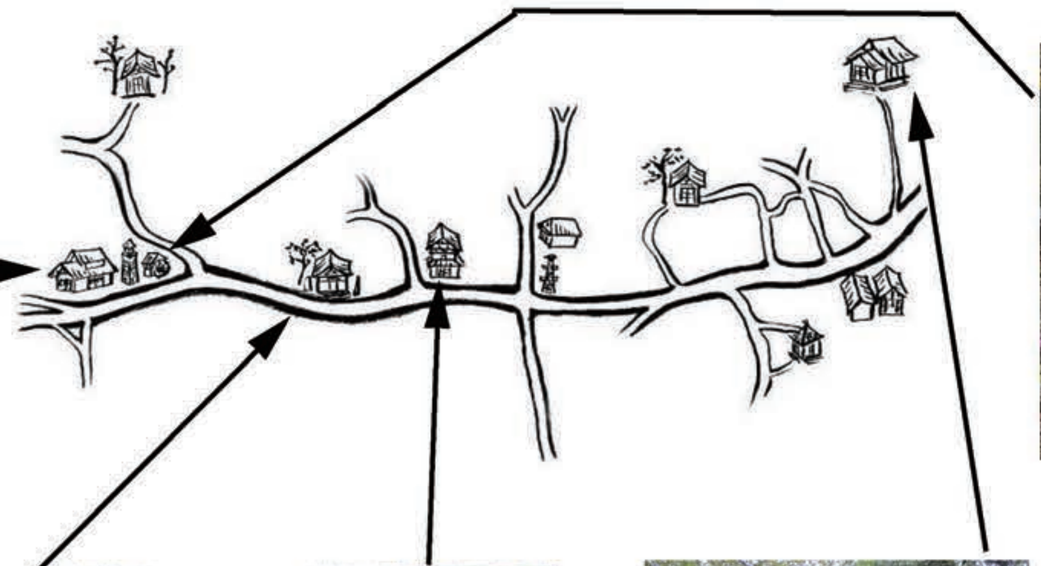
令和４年度ぐんま絹遺産保存活用等推進事業補助金

でも、蚕を育てるのはとっても大変なんだよ。成長期には、どんどん桑の葉を食べるもんだから、一日に何度も畑から桑の葉をとってきて、寝る間も惜しんで食べさせるんさ。

中之条町六合赤岩伝統的建造物群保存地区（中之条町）
（国重要伝統的建造物群保存地区）

白砂川の段丘と山に挟まれた集落です。高野長英をかくまったとされる湯本家のほか、向城の観音堂、毘沙門堂、水車小屋など養蚕集落がそのまま残されています。

中之条町六合赤岩伝統的建造物群保存地区マップ



「ふれあいの家」：
駐車場やトイレがある観光案内所です。

「水車小屋」

「赤岩神社」：明治41年(1908)に赤岩村内にあった五つの神社を合祀してつくられました。

「湯本家住宅」：現在の主屋は、明治30年(1897)に養蚕のため三階部分が増築されました。二階には、幕末に高野長英をかくまったとされる「長英の間」が残っています。

「毘沙門堂」：赤岩地区の他の堂と異なり、この堂は集落内の屋敷が並ぶ通り沿いに建てられています。

毎年春と秋に祭典が行われます。春の祭典の夜には、各家の前庭に立てられたボンボリと呼ばれる灯籠に火が灯され、集落は幻想的で厳かな雰囲気に包まれるといいます。

令和４年度ぐんま絹遺産保存活用等推進事業補助金

それだって、蚕が病気にかかったり、桑が霜でやられたりしたら、お金は入らない。だから、みんな蚕のことを“お蚕さま”って呼んで、我が子同然に大切に育ててきたんさ。

もちろん、神様にもお祈りしているよ。

永井流養蚕伝習所実習棟　（片品村）（片品村重要文化財）

永井紺周郎は、当時、養蚕においてタブーだと思われていた「火や煙」が、この地方においては蚕の成長や病気の軽減につながることに気付き、種々の改良を加え、永井流養蚕術を確立しました。この方法は、蚕室に煙を入れて湿気をとることから「いぶし飼い」とも呼ばれました。

この実習棟は、紺周郎が他界した翌年の明治21年(1888)頃に、紺周郎の遺志を継いだ妻いとが永井流養蚕術の伝習所として建設しました。いとはここで1,500名もの人々に技術を伝えました。

「永井いと像」：日本遺産構成文化財の「永井いと像」は、「花の駅・片品　花咲の湯」に展示されています。

「天王桜」：実習棟のすぐ近くにある樹齢300年を超えるオオヤマザクラ。群馬県の天然記念物に指定されています。

（「きぬ旅」Web ページより）

令和４年度ぐんま絹遺産保存活用等推進事業補助金

永井いと物語

① 慶応4年(1868)、新政府軍と旧幕府軍による戦い(戊辰戦争)が起こりました。その戦いが東北地方にまで及んだある雨の日のことです。

まだ7月というのに肌寒く、三日間も続いた雨で、蚕はすっかり元気をなくしていました。普通なら夜も眠れないほど大きな音を立てて桑の葉を食べる蚕たちが、静かにぐったりしています。「病気だろうか。お蚕さまがみんな死んでしまったらどうしよう。」

紺周郎は心配でなりませんでした。

そのとき、外で人の歩く音が聞こえたと思うと、がらりと乱暴に入口の戸が開けられ、東北に向かう新政府軍の兵士たちがどやどやと入ってきました。そのずぶぬれの兵士たちは、「寒い！火を燃やそう！」と、勝手に薪を集めて火を起こしはじめました。

当時、蚕は煙を嫌うと言われ、養蚕農家は外で火をたいて食事の用意をするほど「お蚕さま」に気を配っていました。紺周郎は、「今年はだめだ。お蚕さまは全滅する。もうお金は入らない。」と、絶望的な気持ちになりました。

② 翌日、兵士たちが去っていったあと、散らかった土間を片付け、蚕のいる二階に上がっていきました。

…「気のせいだろうか？」

蚕の様子が恐れていた予想と違うようです。… どの蚕も元気にばりばりと桑の葉を食べているではありませんか。

なんとその年は、前年以上の収穫をもたらしたのです。紺周郎は、その理由を一生懸命考えました。

そして、次の年、紺周郎は妻のいとと相談して、ある試みをしました。

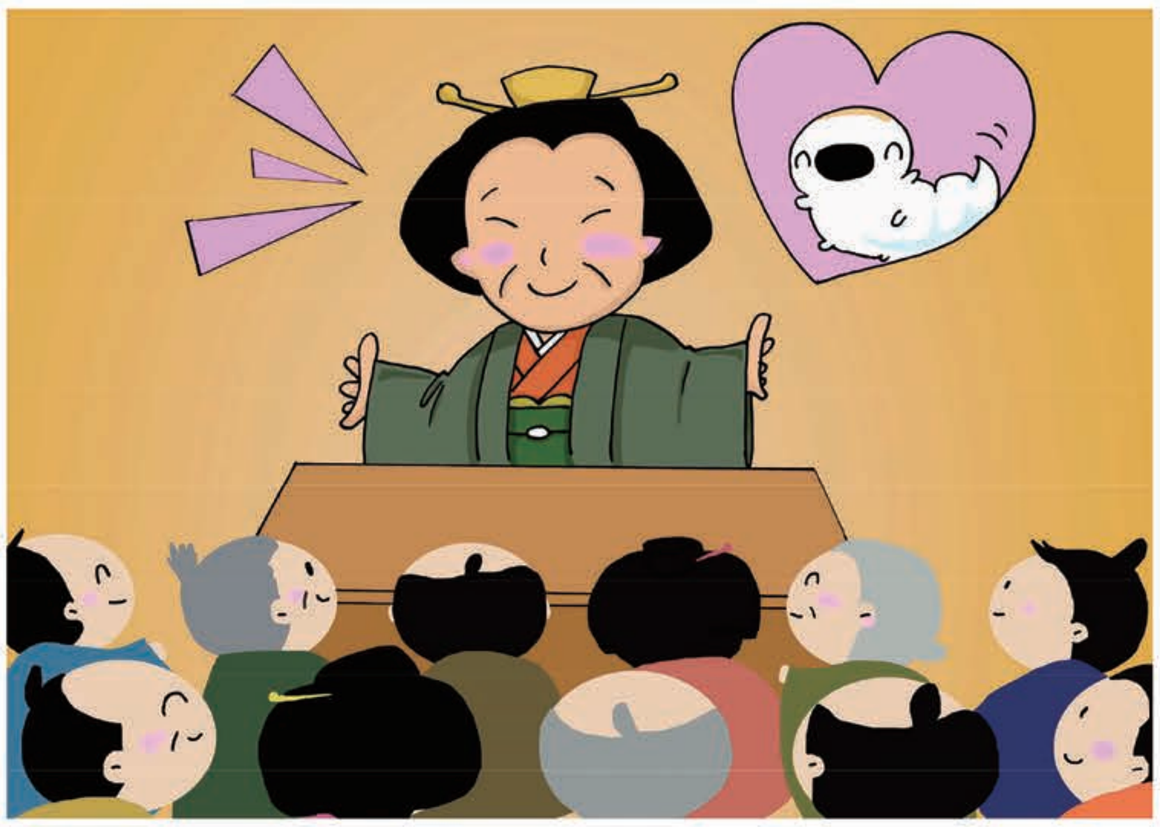
令和４年度ぐんま絹遺産保存活用等推進事業補助金

③　雨で気温が低く、肌寒い日には蚕室でも火を焚き、煙を充満させ、定期的に換気して、注意深く室温を一定に保ちました。（この室温を、紺周郎は「片肌脱いで暑からず寒からず」という言葉で表現しました。）

この実験は成功しました。前年よりさらに豊作になりました。

紺周郎は、この実験でわかったことを、近くの農家の人にも教えました。

人々は容易に信じられませんでしたが、紺周郎の家の収穫が多かった事実を知り、自分たちも試してみるようになりました。



④　こうして紺周郎といとは、「いぶし飼い」と呼ばれる永井流養蚕術を確立していきました。

明治20年（1887）、紺周郎が亡くなると、いとは娘婿の二代目紺周郎とともに、いぶし飼いの普及に努めました。自宅の近くに二階建ての建物を永井流養蚕術の伝習所として建設しました。

ここでは、1,500名もの人々に技術を伝えたということです。

また、いとは、人々に求められれば、自ら馬にまたがって遠方まで講師として出向いていきました。当時は、女性が馬に乗ることはほとんどありませんでした。

いとは教壇で「農家の財布の紐はかかあが握るべし」と語ったそうです。いとが人々に頼られたのは、養蚕術だけでなく、こうした面倒見の良さにもあったのでしょう。いとに「よき母として」「よき妻として」のかかあ像を見た人も多かったことでしょう。

（「片品絹遺産の会」のWebページを参考に（一部引用）しました。）

生糸に向かない繭は、真綿にして紬糸をつくる。

紬糸は、じょうぶな織物ができるんだよ。

令和４年度ぐんま絹遺産保存活用等推進事業補助金